

バンド・デシネにおける認知症の表象：スペイン人作家パコ・ロカのAr rugasを事例に

著者	織田 竜也
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	71
ページ	103-110
発行年	2016-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00001238/

バンド・デシネにおける認知症の表象 ：スペイン人作家パコ・ロカの Arrugas を事例に Representation of Dementia in Bande Dessinée ：A Case of Arrugas by Paco Roca

織田 竜也
Tatsuya ODA

はじめに

本稿は、スペイン人の世界観において認知症はどのように捉えられるのかという観点から、創作作品に描かれた認知症の表象を考察する。具体的にはフランスのバンド・デシネ (bande dessinée) として制作されたスペイン人作家パコ・ロカによる *Arrugas* (しわ) に着目し、作品に描かれた認知症の表象を検討する。バンド・デシネとはフランスで「9番目の芸術」と呼ばれるジャンルでコミックス形式の絵本である。

Arrugas は2007年にフランスの Guy Delcourt Production 社から *Rides* (しわ) というタイトルで、続いてスペインの Astiberri から出版された。2008年にポルトガル、2009年にフィンランド、オランダ、2011年に日本で翻訳・出版された(邦題は『皺(しわ)』)。2008年にはバルセロナのコミック・フェスティバルで「最優秀作品賞 (Mejor Álbum)」「最優秀脚本賞 (Mejor Guión)」、スペイン文化省からコミック部門でのナショナル・プレミオ (El Premio Nacional de Cómic)、日本では2011年に第15回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞が贈られた。

2011年にはイグナシオ・フェレラス (Ignacio Ferreras) 監督によってアニメ作品として映画化された。映画は同年、スペイン映画芸術科学アカデミーにより第26回ゴヤ賞において「最優秀アニメーション賞 (Mejor Película de Animación)」「最優秀脚色賞 (Mejor Guión Adaptado)」が贈られた。

パコ・ロカ (Francisco José Martínez Roca) は1969年、スペイン・ヴァレンシア生まれの絵本作家である。イラストレーターから作家に転身し、2000年代に *Gog* (ゴグ)、*El Juego Lúgubre* (陰鬱なゲーム)、*El Faro* (灯台) などの作品を発表した。*Arrugas* の後には *Senderos* (小径)、*El Ángel de la Retirada* (退却の天使)、*El Invierno del Dibujante* (マンガ家の冬) などを発表している。

なお、本稿でのスペイン語の日本語訳は原則として織田によるもので、邦訳『皺』とは表現が異なる。



図1 *Arrugas*

©2007 Astiberri, Paco Roca

1. 物語の概要

作品は銀行の支店長を退職した老人エミリオ (Emilio) と息子ファン (Juan) のやりとりから始まる。銀行の個室でエミリオは融資が難しいと伝えるが、話し相手である息子のファンは自分は融資を頼んでいないと混乱する。ファンが「夕食を食べて欲しいだけだ (Lo único que quiero es que te comas de una vez la cena.)」と言った瞬間、場面

はエミリオの寝室に切り替わる。

ファンはエミリオを介護施設に連れていき入所の手続きをする。手続き中に廊下で待機するエミリオは元ラジオアナウンサーのファン (Juan) と出会うが、彼は相手の言葉をオウム返しすることしかできない。続けてエミリオは相部屋で暮らすことになるミゲル (Miguel) と出会う。ミゲルは施設を案内しながら言葉巧みにエミリオから10ユーロをくすねる。

ソル (Sol) 婦人はいつも自分は治ったから息子たちに電話をしたいと思っているが、すぐに忘れてしまう症状を示す。電話はどこにあるかとミゲルに尋ねると、ミゲルは金を要求する。ロサリオ (Rosario) 婦人は自分がイスタンブール行きオリエント急行に乗車していると思込み、終日窓の外を眺めている。ここでもミゲルは検札と称してロサリオ婦人から金をせしめる。

食堂ではアントニア (Antonia) 婦人、モデスト (Modesto) とドロレス (Dolores) 夫妻と食事を食べる。アントニア婦人はエミリオが残したバターを鞆に入れる。モデストはアルツハイマー病を発症していて、妻のドロレスが食事を口に運ぶ。ドロレスが耳元で何かを囁くとモデストは少し微笑む。

寝室で目覚めるとエミリオはミゲルに腕時計を知らないかと尋ね、ミゲルは知らないと答える。トレーニングの時間では座ったままで受け取ったボールを隣の老人に渡す競技を行なう。90歳を超えるアグスティン (Agustín) は耳が聞こえない振りをして女性介護士の胸を触る。エミリオは競技の最中、「ボールを受け取って隣に渡して (Toma la talope y pásala.)」と言われるが「ボール (La talope)」という単語が指し示すものが自分が手に持っている球体であることがわからなくなってしまう。

廊下ではペリセール (Pellicer) に出会い、陸上競技で活躍した昔の記事を見せられそうになるがミゲルが引き留める。軍に服役した妄想のまま目を閉じて座っているフェリックス (Félix) とすれ違い、食堂で再びソル婦人から金を掠め取る。その様子を見ていたアントニア婦人とミゲルの間で口論になるが、アントニア婦人は歩行器でミゲルの足を踏み、ティーバッグの包みを手にして立ち去る。

ミゲルはエミリオに、向こうで座っている二人の男女とそれを眺める老人をどういう関係だと思いか尋ねる。エミリオは夫婦とその家族と答えるが、ボケて意中の男性に寄り添って眠る女性とその様子を眺める彼女の夫だとミゲルは教える。人生に悲観的なミゲルに対して、エミリオはモデストとドロレ

ス夫妻を指さし「老年期の愛の素敵な物語だ (Ahí tienes una bonita historia de amor en la vejez.)」と主張する。

ビンゴゲームの場面では、20番が出るとファンが「20!」と繰り返すが、アグスティンは良く聞こえず、フェリックスも番号を認識できずに混乱する。

夕食ではアントニア婦人が自作の詩を披露し、老人 (Viejos) ではなく年長者 (Mayores) と呼んで欲しいと言うが、ミゲルは老いをからかう発言をする。アントニア婦人は反論しつつ、テーブルの小さなケチャップを鞆に忍ばせる。

食後、寝るために介助が必要な老人たちは順番を待つために一時間以上並んでいる。エミリオは待つ間に何かすることはあるのか尋ねると、ミゲルは食べるものと寝ること以外にすることはないと答える。

ミゲルはソル婦人にいたずらし、雨の降る屋外で電話を探すように言う。ソル婦人の後をオウム返しのファン、カルメンシータ (Carmencita) 婦人が続いて歩くのをミゲルとエミリオは室内から眺める。カルメンシータ婦人は火星人にさらわれることを恐れて一人で過ごすことができない。寝室ではエミリオは仕事に行く準備といって髭を剃るが、午前三時だと言われて気まずい思いをする。

エミリオはクリスマスの準備をするアントニア婦人とペリセールに、どうしてこんな時期に飾り付けをするのかを尋ねるが、来週がクリスマス、忘れたのか、頭がどうかしたのかと返答されて言葉に詰まる。廊下でミゲルに会うと、ミゲルはマルティン (Martín) に頼まれたペットの犬を調達して代金を受け取る。

施設に家族が訪問する日、寝室で準備をするエミリオは、ジャケットの上にセーターを着ていることをミゲルに指摘されるが、自分はいつもこうやって着ていたと言い張る。財布が見当たらず、ミゲルが盗ったのかと問うが、ミゲルは違うと答える。ホールではそれぞれの家族が老人の話を聞いている。盲目のエステバン (Esteban) はフェリックスのいびきで眠れないが部屋を変えてもらえないと苦情を訴える。ペリセールは陸上競技で活躍した若い頃の話の繰り返す。エミリオはジャケットの上にセーターを着たまま家族と写真を撮り、ロサリオ婦人はオリエント急行に乗車したまま家族と話す。アントニア婦人は日頃集めておいたバター、ティーバッグ、ケチャップ、オリーブオイル、石けんなどの小物をこっそりと孫にあげようとするが、孫は困惑する。

クリスマスの夕食の際、エミリオは何度も同じ話をしていることを指摘される。配布された薬がアル

ツハイマー病のモデストと同じ葉だと言われて驚き、施設内の医者を訪ねる。エミリオは医者からアルツハイマー病の初期症状が見られると告げられるが、受け入れることに抵抗する。

将来を恐れたエミリオはミゲルと一緒に、アルツハイマー病の患者が収容されている二階のフロアを見学する。扉を開けるなり両親を探す婦人に腕を掴まれる。どこかから意味不明な呻き声が聞こえる。ある婦人は食事を目の前にして食べるものがないと言う。別の老人はブツブツと意味不明の言葉を繰り返す。半身不随のホームレスだった女性は口汚く罵る (¡Viejo hijo de puta!)。エミリオは自分はここに来るのは絶対に嫌だと強く思い、ミゲルに協力を求める。

ミゲルはエミリオを図書室に連れていき、本を毎日読むことを提案する。エミリオは本を読むが、タイトルを問われると思ひ出すことができず、本を放り投げてしまう。

エステバンが介護士のファン (Juan) にフェリックスのいびきの苦情を訴えているところに遭遇し、エミリオの様子がおかしいことに気付かれる。食事の時間、エミリオはスプーンで肉を切りながらナイフが切れないので、介護士を呼んで文句を言う。ミゲルは機転を効かせてランチはサンドイッチにして欲しいと言い換える。

アントニア婦人はドロレス婦人に、モデストが微笑む時に何を囁いているのかを問う。ドロレス婦人は若い頃モデストに告白されるが、雲を取ってくれたら付き合っても良いと答えた。モデストは村の塔にドロレスを連れて行き、二人で流れて来る雲に包まれる。そのときに彼女は「ズルイ! (¡Tramposo!)」と言ったので、今でもそう言うモデストは微笑むのだという。

エミリオが介護士の検査を通過するように、ミゲルは様々な仕掛けをする。診療室の電球を外したことで検査はホールで行なわれ、ファンが介護士の後ろで騒ぎ、エミリオは回答を手の平に書いてカンニングをする。エミリオがうまく回答できないので、ミゲルは介護士にシプリアーノ (Cipriano) の異変を伝え、検査は後日になる。そこにマルティンがやってきてまた犬を用意して欲しいと言う。

食堂では、モデストの具合が悪くなりドロレス婦人と一緒に二階で生活することになったとアントニア婦人が告げる。ミゲルは思い立ち、三時間後に落ち合う約束をして席を立つ。

夜、三人は施設の外に脱出する。ミゲルはオープカーを手配するが運転免許証がなく、数年前に免

許証を取り上げられたエミリオに鍵を渡し、アントニア婦人と乗車する。走り始めるとミゲルは「自由だ! (¡Libres!)」と叫び、アントニア婦人の歩行器を投げ捨てる。しかしながらアントニア婦人とエミリオは寒いので屋根を締めて欲しいと言う。車は事故を起こしてしまう。

アントニア婦人は腕を骨折した。ミゲルは施設で管理者に叱責される。ソル婦人から掠め取った金を返金しないと施設には残れないと伝えられる。廊下に出るとエステバンが現れ、ミゲルに大きめのスパナを手に入れて欲しいと頼む。

夜中、エステバンはいびきが我慢できないとスパナを振り回して暴れる。介護士が部屋にたどり着くが、エステバンは立ち上がったフェリックスをスパナで殴ってしまう。

ミゲルはエミリオのジャケットや靴にラベルを付けてボケ防止に協力するが、寝室で無然とするエミリオは、ミゲルが靴下を盗んだ犯人だと決めつけてスーツケースを抱え込んでしまう。ペルセールが大切にしていた昔の記事に悪戯されていることが発覚すると、どうやら犯人はエミリオであることを知ってミゲルは笑う。

エミリオの病状は進行し、とうとう二階で生活することになる。ミゲルはエミリオがいなくなることで意識を変える。息子に電話をしたがるソル婦人に対して自分の携帯電話で電話をする。犬を欲しがまるマルティンに対して伸びるリールをプレゼントする。寝室でエミリオが使っていたベッドを散策すると、マットレスの下からエミリオが盗まれたと言っていた財布や靴下が出てくる。ミゲルは二階に行ってエミリオに食事を食べさせる。アントニア婦人はロサリオ婦人の隣に座り、一緒にオリエント急行の気分になろうとする。(見開きが空白の2頁を経て) マルティンは息子の家のエレベーターに乗り、犬が乗る前に動かしてしまう。リードが伸びたお蔭で犬は助かる。

2. 見え方の異なる世界

作品ではバンド・デシネの特徴を生かして、当事者だけに見える世界が視覚的に描かれている。エミリオは冒頭の場面で、寝室で息子のファンに食事を取るように言われるが、本人は銀行の個室で融資を検討しているつもりである。フェリックスは施設での生活を軍隊での生活に読み替えて妄想している。この二つのケースでは、過ぎ去った過去の生活経験が現在の当事者の世界観としてリアリティを持

っている。

窓際で座っているだけのロサリオ婦人の世界は、オリент急行に乗車してイスタンブールに向かって窓の外を眺めている。彼女が見ている光景は過去の思い出あるいは未経験の願望によって生み出されている。カルメンシート婦人は誰の目にも見えない火星（Marcianos）を恐れて日々暮らしている。彼女の恐怖心や孤独感によって火星という不確かな存在が可視化されている。

彼らの世界観は目の前の日常世界とはかけ離れた現実であり、当事者以外の人間が共有することは困難を伴う。他の人間には見えないリアリティを共有するには、虚構を信じる、設定を受け入れる、ごっこ遊びとして振る舞うような態度が求められよう。当事者の世界観は景観としてばかりでなく、強いこだわりとして出現することもある。

表1 当事者の世界観

エミリオ	銀行での融資
フェリックス	軍隊での生活
ロサリオ婦人	オリент急行
カルメンシート婦人	火星

エミリオは腕時計、財布、靴下などが同室のミゲルによって盗まれていると思いついでいる。服装に関してはジャケットの上からセーターを着込む。夜中に出勤の準備を始める、クリスマスの時期に気がつかないなど、日時の感覚がわからない。当事者の世界観において独特の論理が支配しており、その論理は外側の世界と共有されていない。暦や時刻の観念は他者と時間感覚を共有する象徴であって、楽しい時間は速く、退屈な時間は遅く感じることに通じる感覚である。

元ラジオアナウンサーのファンは随所で登場するが、常に他者の発話をオウム返しする。共有される言語体系が失われ、言葉が意味ではなく音として使用される事例だろうか。

ソル婦人は自分が施設にいる現実を認識しつつも、病気は治った（と本人は思いついでいる）のに滞在していることが我慢できない。息子たちに迎えに来てもらうためにいつも電話を探している。電話に近

づいても、歩いているうちに自分が何をしていたのかを忘れてしまう。この事例のように、現実の病院や銀行などにおいても、患者や顧客から何度も同じ用件で電話がかかってくることもあるという。

ペルセールは首から銅メダルをかけた人物として描かれ、若い頃に陸上競技で活躍した話を何度もしたが。家族が訪ねてくる場面でもその話をしているが、息子らしい人物は新聞を読み、息子の妻らしき人物は時計を見ている。これなどは必ずしも認知症特有の症例ではなく、年を重ねると多くの人間に発生する事象であろう。

アントニア婦人は詩を作ったりミゲルと口論したり、思考力があり人生に肯定的な人物として登場する。だが随所でバター、ティーバッグ、ケチャップなどを密かに鞆に忍ばせる。家族が訪ねた日にはこれらを孫にあげようとするものの、孫に困惑されてしまう。彼女にとっては大切なものが、他者にとってはそうではないという事例として描かれる。

表2 症例

エミリオ	盗難被害の思い込み
	不自然な服装
	日時の感覚がない
ファン	発言をオウム返し
ソル婦人	何度も電話をしたがる
ペルセール	昔の活躍を話したがる
アントニア婦人	食べ物を収集する

医学的な観点から認知症はどのように語られるのか。ロカは執筆に際してアルツハイマー病に関して勉強し、取材と作画に一年かかったと述べている（ロカ、2011年：171）。医学的な知識はエミリオが医者と話合う場面から伺われる（Roca, 2014: 56-57）。

El Alzheimer es una forma de demencia senil. La demencia es la pérdida de las funciones mentales,

memoria, lenguaje, capacidad de razonar... se alteran la conducta y la vida social.

訳：アルツハイマー病は老齢による認知症の一種です。認知症とは心の機能、記憶、言語能力、論理性が失われてしまう症状で、行動や社会生活が変わってしまいます。

Y lo de senil se usa porque suele ser más habitual en edades avanzadas. Es muy característica la pérdida de memoria reciente, sin embargo, la memoria pasada sigue funcionando bien. En parte es por eso lo que los mayores hablan sólo del pasada.

訳：老齢による認知症は高齢者には一般的に見られる症状です。顕著な特徴としては最近の記憶を失う一方で、昔の記憶は活性化します。そのため、年寄りには昔のことばかり話すのです。

Pero ahora bien... El Alzheimer es un tipo concreto de demencia, la más frecuente. Alrededor del 60% de las demencias son tipo Alzheimer.

訳：それで、アルツハイマー病は認知症の具体的な形態で、最も良く見られます。認知症のほぼ60%がアルツハイマー型なんです。

Además de la memoria reciente, con el tiempo se destruyen la memoria pasada, la orientación, el lenguaje, la capacidad del enfermo para cuidarse y dirigir sus actos por sí mismo.

訳：最近の記憶だけでなく、時間の経過と共に昔の記憶、方向感覚、言語能力が失われ、患者が自力で自分の行動に注意したり、制御したりできなくなります。

3. 摩擦

周囲の人間は認知症にどのように対応することになるのだろうか。対人関係における摩擦が描かれた場面を抽出してみよう。冒頭、銀行の融資の話を巡るエミリオと息子フアンのやりとりは次の通りである。

Juan: No lo aguanto más. Acabará volviéndome loco.

訳：もうこれ以上我慢できない。気が変になってしまいそうだ。

Emilio: Ya os podéis ir.

訳：それなら出て行けばいい。

(Roca, 2014: 8)

腹を立てたエミリオは寝室に用意されたスープをフアンの顔に投げつけてしまう。施設に入る直前の場面で家族の忍耐が限界に達する状況が描かれている。

他ではアントニア婦人と孫とのやりとりが描かれている。クリスマスの季節に家族が施設の老人を訪ねて来るが、アントニア婦人には孫が一人だけでやってくる。

Antonia: La abuela tiene unas cositas para ti. Me lo he ido guardando para ti. Ketchup, aceite de oliva muy bueno que nos ponen en la comida. Una pastilla de jabón que cogí del casino en el que estuvimos...

訳：あげる物があるの。あなたのために取っておいたのよ。食事に付いてたケチャップとオリーブオイル。カジノに行ったときの石鹸 ...

El nieto: Pero, abuela... ¿Para qué quiero yo...?

けど、おばあちゃん ... どうして僕が ...

Antonia: ¡Calla! Y guárdatelo bien, no te lo vayan a quitar.

訳：黙って！誰かに盗られないようにしようのよ。

(Roca, 2014: 52-53)

アントニア婦人にとって宝物のように見えるのは、食卓に恒常的に登場する小分けにされたケチャップやティーバッグ、オリーブオイルや石鹸、セリフにはないがリングも描かれている。摩擦は発生していないが、孫以外の家族が誰も訪ねてきていない状況が暗示されており、祖母と孫という力関係によって孫の反発が抑えられているようにも読める。

この程度の摩擦であれば、周囲の人間は戸惑いつつも、認知症と思われる人間の世界観に合わせた対応を取っていくこともできそうに見える。しかしながら事態はそこに留まらない。

4. 生命の危機

認知症の症状によっては、対人関係に支障が生まれるばかりでなく、周囲の人間に危害が及ぶことも描かれる。一つ目の事例は交通事故である。ミゲルは施設での暮らしにおいて、食事の味が薄いとか、楽しみがないとか、多くの不満を抱いていた。モデストとドロレス夫妻が二階に連れていくことをき

っかけに、老いを受け入れることにやり切れない気持ちになり、施設からの脱出を試みる。施設でだまし取って貯めたであろう金を使ってオープンカーを手配し、エミリオに鍵を渡してアントニア婦人と車に乗り込む。

ミゲルは登場する老人たちの中では、施設の外で暮らしてもやっていけそうな人物として描かれる。金をだまし取る行為は少額とはいえ詐欺的ではあるものの、施設内の食事や活動に対する不満は施設の外で暮らす人間の目線に近い。しかしながら、彼が率先して施設からの脱出を試みる際、そこでの行動は自分の価値観を他者に押し付ける自己中心的な人物として描かれる。

ミゲルは運転免許証を持っていないにも関わらず車を手配する。既に免許証を取り上げられているエミリオに車の運転を託す。アントニア婦人が車に乗り込めないと背中を押す。走り出すとアントニア婦人の歩行器を車外に投げ捨てる。金のことを問われると自分の新しい会社に投資してくれる人がいると疑わしい話をする。冬の夜にオープンカーで走りたがる。

ミゲルの内面において施設内で蓄積していった不満に、アルツハイマー病になれば二階に連れていかれるかもしれない将来に対する不安が加わって、オープンカーによる施設からの脱出はそのはけ口となった。結果は交通事故が起き、アントニア婦人が腕を骨折する。

ミゲルの場合、本人の人格によるものなのか認知症の症状によるものなのか判断し兼ねるが、金銭に固執したり、虚言によって話を合わせたりする行動は症例として描かれたとみなしてよさそうである。何らかの原因があって施設に入っているのだが、本人は健常者と変わらないと考えており、欲望が旺盛の場合にはこうした問題が発生するということがある。

もう一つの事例はエステバンの暴力行動である。盲目のエステバンは脇役として登場し、物語の進行には重要な役割を果たさない。しかしながら随所で同室のフェリックスのいびきについて苦情を訴えており、スパナでフェリックスの頭を殴りつける伏線となっている。エミリオとミゲルの対話からエステバンの事情が伺われる。

Emilio: ¿Es ciego?

訳：彼は目が見えないのか？

Miguel: Sí. Hace un año le dio una subida de azúcar. Llegó aquí con su mujer... Pero desde que

se la subieron arriba está muy raro.

訳：そうだ。一年前、血糖値が上昇して、奥さんと一緒にここにきた…だが奥さんが二階に行ってから奇行が目立つ。

(Roca, 2014: 28)

事件後、エステバンは数日前に妻が亡くなり、強い鬱状態だったとアントニア婦人が語る。頭から血を流したフェリックスの怪我の具合は語られない。認知症が鬱病を併発することは知られているが、蓄積された不満が暴力として出現するタイミングは予見が難しい。認知症の人間が欲望を訴える場合、その欲望は理不尽であったり、心身の状況を悪化させかねないものであったりする。エステバンの場合、いびきの苦情については放置されたまま、スパナを入手して欲しいという要望にミゲルが対応したことが事件に繋がっている。

この二つの事例は自動車やスパナなど、使い方を誤れば人間を傷つけかねない道具を認知症の人間が扱うことはきわめて危険であり、容易に一般人の行動を当てはめて考えてはならないという教訓として描かれている。

5. 二階の世界

施設の二階は「不安」や「恐怖」を象徴する空間として描かれる。物語の前半でエミリオが二階について訪ねても、施設を案内していたミゲルの返事はアルツハイマー病などの認知症が進行した人が生活する場所で、詳しくは説明したくないというものである。

だが物語の中盤でエミリオが医者からアルツハイマー病の初期症状が見られると告知されると、エミリオは二階を覗いてみたいと言う。ミゲルは了解して一緒に二階に上がっていく。二階では次のような混乱が描かれる。

- ・意味不明の会話
- ・叫び声、鳴き声
- ・現実と矛盾する発話
- ・繰り返される独り言
- ・罵声

二階の住人たちは表情も独特であり、発話、行動、情緒の点で違和感が感じられるように描かれている。いるはずのない両親を探していたり、目の前に食事があるのに食べるものがないと言う。繰り返される

独り言、叫び声や罵声は、相互のコミュニケーションをとることが困難であることを示す。

人間のコミュニケーションにおいて、言語による相互理解ができないことはある種の恐怖を生み出す。ここでは言葉が通じない異文化状況とは文脈が異なる。一つ目は、スペイン語が話されているのに目の前の現実とかみ合わない意味内容となっている。二つ目は、スペイン語が話されているのに、他者とのやりとりを拒絶した発話になっている。三つ目は、言葉ではなく意味不明の音が口から発せられている。

つまり言葉が通じない異文化状況においては、目の前の人間は何らかの別の言語体系に基づいて言葉を発しているのに対して、二階で出会う人たちは言葉を使いこなす人間という行動様式から逸脱した人たちである。ここである種の恐怖が生じることは不思議ではない。ロカは二階のアイデアについて、日本のホラー映画から着想を得たと述べる。

実は日本のホラー映画の影響もあるのです。『呪怨』(清水崇監督/2002年/スペイン語版タイトルは『La Maldición (呪い)』)という映画だったと思いますが、家の2階に何か化け物が住んでいて恐ろしいという設定でした。スペインの老人ホームは2つの部分で成り立っていて、たいてい1階(下層)の空間には自分で生活できる人たちが住んでいます。階下の住人にとっては、上の階のことは自分たちにも起こり得るけれど見たくないという状況なので、2階への階段をことさらに大きく、威圧感があるように描いたのです。(ロカ、2011年:172)

物語の空間は施設の外部と内部、施設の一階と二階で描き分けられる。生活に支障が生じることで施設に入ることになり、さらに認知症が進行すると一階から二階へ移動する。

「①施設の外部」では日常生活が営まれるが、施設の内側は特別な生活空間となる。エミリオが入所することになった「②施設の一階」では、ミゲルが不満を抱くように食事や活動の面で制約が多くなる。しかしながら彼らにとって「③施設の二階」は独力で生活できない人、自分を失った人が生活する場であって、遠ざけておきたい、ロカのいう「見たくない」空間となる。

表3 ミゲルのセリフによる空間の意味づけ

①施設の外部	¡Libres! (Roca, 2014: 78) 訳: 自由だ!
②施設の一階	No sé para qué tantas pastillas, tantas dietas y tantas prohibiciones. (Roca, 2014: 24) 訳: 薬、節食、禁止事項ばかりだ。
③施設の二階	Me deprime subir ahí. (Roca, 2014: 20) 訳: 二階に上がると落ち込むよ。

6. 平穏

作品には認知症に対して悲観的な面が多く描かれるが、ロカは厳しい現実から目を背けずに、それでいて何とか光明を見出そうと努めているかのようである。

クリスマスの時期に家族が訪ねて来る直前、エミリオは家族が来ても来なくてもどちらでもいいと言う。だが家族と過ごした後にはゆったりと微笑んでいた。それを見たミゲルは次のように言う。

Los viejos nos conformamos con tan poco.
訳: 老人はちいさなことで満足するものだ。
(Roca, 2014: 53)

皮肉を言ったりケチをつけることが多いミゲルも、このときは相部屋の友人エミリオと並び立ってゆったりと微笑んでいる。穏やかなこのシーンは物語の終盤にも引き継がれる。ミゲルは二階で暮らすことになったエミリオの口に食事を運ぶ。その際エミリオから見た光景として、ミゲルの顔は「輪郭」→「ぼやけた表情」→「明確な顔」とコマが進み、ミゲルの顔が見えるとエミリオは微笑む。それを見てミゲルもまた微笑むが、次第にミゲルの顔は輪郭だけになり、空白のコマが現れる。認知症の人間にとって世界がどのように見えるのかをロカが考え、工夫して描いた表現である。

ここで思い出されるのはモデストが二階に連れていかれた場面だ。ドローレス夫人がモデストと一緒に二階に上がっていったことを聞いたミゲルは次の

ように言う。

Eso es como suicidarse. Dos semanas ahí arriba y acabara tan loca como los demas... ¿Cómo se le ocurre...?

訳：それは自殺するようなものだ。二階でおかしな連中と二週間も過ごしたら... どんなことになるかわかるだろ？

(Roca, 2014: 72)

ミゲルのこの発言に対してアントニア婦人は、誰かを愛した経験のないミゲルは、ドローレス婦人の行動を理解できないのだと指摘する。このときのミゲルと、交通事故を起こし、エミリオのマットレスの下から腕時計や財布を発見した後のミゲルの世界観は大きく異なる。ミゲルは二階でエミリオの口に食事を運ぶことで、エミリオと微笑みを共有する。このとき初めて、彼は「愛情」について理解を深めたのかもしれない。

同様の平穏はアントニア婦人の行動によっても描かれる。アントニア婦人は歩行器をつきながら、車椅子に座って窓の外を眺めるロサリオ婦人に近づく。ロサリオ婦人はオリエント急行に乗っているのだ。

Antonia: ¿Está ocupado este asiento?

訳：隣の席は空いていますか？

Rosario: ¿Usted también va a estambul?

訳：あなたもイスタンブルに行かれるんですか？

Antonia: Sí.

ええ。

Rosario: Los cárpatos son tan bonitos en primavera.

訳：春のカルパティア山脈は本当に綺麗ですよ。

(Roca, 2014: 97)

表1で示したように、ロサリオ婦人は見え方の異なる世界に住み込んでいる。オリエント急行に乗っているかのように、いつも一人で窓の近くに座っている。物語の前半では、ミゲルは検札と称してロサリオ婦人に近づいて金を取る。しかしながらここでアントニア婦人は「隣の席は空いていますか？」と尋ね、妄想の世界へと身を寄せていくのである。

果たしてこの方法が認知症の、とりわけ独自の世界に住み込んでいる人たちへの対応として、望ましいものかどうか断言はできない。だが、ミゲルがエ

ミリオと微笑み合うシーンに続いて、架空のオリエント急行の座席に並んで座るロサリオ婦人とアントニア婦人の姿は、一階と二階のギリギリの境界において、人と人が切り結ぶコミュニケーションの一つの形態を描いていると考える。そこに流れている穏やかな愛情は読者の情緒に響く。

空白の見開き二頁を挟んだ最後の頁では、犬を連れてマルティンがエレベーターに乗るが、犬が乗り込む前にかごが上昇してしまう。だがミゲルが伸びるリードをプレゼントしておいたお蔭で犬が一命を取り留める。最後のマルティンのセリフはうっかりしてはいけないと犬を諫めるものだ。認知症の人間が世界観を変えることができないのであれば、対処療法的に周囲の人間が対応しなくては、生命が危険にさらされてしまう現実を描いている。

7. 終わりに

本稿ではバンド・デシネにおける認知症の表象を手がかりに、どのようなスペイン語表現が使用されているのかに注意しつつ、登場人物の行動や世界観を考察した。文化人類学における異文化接触や医療人類学の近年の考察と結び付けて論じたい場面が多々あったが、安易な考察は最小限に留め、物語で使用された表象を丁寧に抽出することに努めた。今後はイグナシオ・フェレラス監督によるアニメーション映画を併せて考察し、他者理解、複数の世界観の繋がり方について探求を続けたい。

参考文献

- Ferreras, Ignacio (Director)
2011 Arrugas [Motion picture]. España, Perro Verde Films.
Roca, Paco
2014 [2007] Arrugas, 11ª edición. Astiberri Ediciones.
原 正人
2013 『はじめての人のためのバンド・デシネ徹底ガイド』
玄光社。
ロカ、パコ
2011年『皺』小野・高木訳、小学館集英社プロダクション。

(長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科
日本語日本文化専攻)
(oda@nagano-kentan.ac.jp)

(平成 28 年 4 月 4 日受付、平成 28 年 5 月 23 日受理)